

人口問題研究所  
研究資料第四号

昭和二十一年九月 日

産兒制限と社會主義

厚生省 人口問題研究所

人口問題に対する社会主義的見解については「国家学辞典」中エルスタト稿の「人口問題」の中にも簡単に学史的紹介があり、又セートブルの著書「マルサス人口論」に対する社会主義者の態度（一八八六年）は一層詳細な古典的文獻であるが、出版年度はいささか古く、前世紀末葉以降の出生制限傾向、従つて又これと表裏をなす出生制限の普及の事實に対する社会主義的見解を覗うに不便である。エーリツヒ・ワンスヘルムの小冊子「出生制限と社会主義」(Gebühren und Chrenking im Sozialismus (1922)) は「社会主義的人口論の学史的試み」といふ副題を示すように、セートブルの企てを継承しながら、特に最近の出生制限問題に対する社会主義的見解を主として独逸のマルクス主義的社会主義者について敘述したもので、この問題に対する概観的資料として便利なるものである。本書は特に此の部分の大意を翻約せるものである。但し著者ワンスヘルムが企図するところは單なる紹介にあるよりも寧ろ独特の自論を言はうとするところにある。所謂人口問題が社会主義の理論体系に於て最も欠けたる乃至は不充分なる部門であることを指しながら、之をマルサス的人口理論と対置させ、将来の社会主義的社会に於ても或は特にかゝる理想社会に於ても、新マルサス主義的、特に優生学的見地よりする人口制限の必要を主張しようとする案にある。その論旨は本報雜約紹介せる部分に於ても特に修正主義とマルサス主義との融合を求めようとする方向への共鳴的論述の中に明瞭にあらはれてゐる。その主張の当否は別として、一個の参考意見として一応の傾嚮に値するものといへよう。

全集の構成について一言すれば、論述は前後兩編に分れ、前編は「生活空間 Lebensraum」の理想

なる表裏下に、社会主義人口理論の及マズロズ的、即ち人口に対する肯定的な、樂觀主義的存在  
主義の批評的叙述に當てられてゐる。過剰人口の資本主義的特性を暴露し、均平の社会主義的社  
会に於ける生産空間の劃期的な拡大と之に伴ふ人口増加の進退を附随すること、は、舊習によら  
ば、人口増加こそ過剰の増大の源泉なりとの考へを根本の原則的前提としてゐるもので、かような  
人口に対する肯定的、樂觀主義的態度こそ少くとも後の修正主義者を除く正統マルクス主義社会  
主義者たちに共通な立場であることとなる。

その批評的叙述には別に斬新なものがあるわけではなく、例へばマルクスに對する批評に  
ついても資本主義の法則から解明される過剰人口論が單なる失業人口問題の解明に過ぎず、マルクス  
の全論綱は根本に於て人口の絶対的なる増殖力と暗に前提してゐることの通説的批判の場を越え  
たものでは無い。

エンカルスは賤價の再生産と改入で生命の再生産をも唯物史観の必然として明記してゐるが  
その体系的な展開は遂に試みられぬところが多く、また科学の進歩に伴ふ生活空間の異常なる  
拡大を批判する實に於ては將來社会に對する反マルクス主義的樂觀論の最初の代表者といつてよ  
いものと着目はしない。

ラッサールに對しては、着目はその労働基金説がマルサスマ人口論を前提としてゐるといふ一節  
の見解をとりわけ、ラッサールは人口増加こそ富の増加の源泉なりとの原則を固守し、資本主義  
社会に於ける過剰人口を此の原則に於ける一例外として見てゐる事が鮮しく論証されてゐる。  
その他マルサール、シツペル、カウツキー等の諸説も、就中マルサールの樂觀主義的立場を証據立てる  
もので、大が其後の修正主義者たちに對して人口理論の上にも若干の修正意見が散見せられる。

その前提として著者は、カウツキーの人口論を批判せる。人口理論家としてのカウツキーの著書「エツセルとマルクス」に、マルクス主義の放棄理論を反駁せる。「社会主義と農業」の著書「エツセル」に於ては、マルクス主義支持者として人口問題が社会主義にとって衆議主義的附帯の下に看過し得ざる問題であることを説いてをり。カウツキーは生物的自然の保守主義が人間の積極的なる努力に對して極めて服従く且つ愈々増大するところの抵抗力を示すものであることを農業生産の発展に關する條件と限界への分析を介して暴露してゐる。

三

が修正派の見解について、好くなき。資本社会に於ける生活空間の劃斷的拡大を説く修正派の人口理論も人口の無制限なる増殖傾向を懸視することほできない。勿論、社会主義的人口論の立場からいへば、人口増加は全く社会的環境に制約される現象で、過剰の生産人口を考へらるるものは實は皆社会機構の欠陥を示すもので外ならぬ。そして社会主義的秩序をその能力なく増加を可能にし、それによつて又経済的地域的発展への根本動力となるものとして考へらるべきであるが、併し我々が考察の対象を更に遠い未来にまで延長する場合にば、はるかに遠くかゝる増加速度緩和の期待乃至必要がなげられなければならない。いひかへれば自然的乃至社会的理由に基づく生産政策と人為的政策の互理由による生産制限の問題が論議となつてくるわけである。著者は後篇を「生産再生産 (reproduction) の理論」なる表題下でこの問題の論議に於て、そのは更に「発展 (development) の理論」及び「干渉 (interference) の理論」の二部に分けて論議してゐる。

先づ「発展の理論」或は社会主義的「生産政策論」として注目すべきものとしては、マルクス自身

社会主義的社會に於ける環境の危險の増大する原因は種々の動物が生物學的に出生の減少  
 を伴ふといふ事實を指摘してゐる。その生物學的種族の増殖するべきものは、ベルに於  
 ては第一層明瞭に観察され、その結果として、種々の動物が種族の増殖を今日マルサス論者の杞憂を項はす  
 るが種々の動物の増殖を種々の動物が種族の増殖を今日マルサス論者の杞憂を項はす  
 には及びぬといへば、又カウツキーは一般生物界の増殖理論として種の生命に対する危  
 險の減少が出生力の減少を伴ふことを指摘し、一種の生物學的危險説 *Biological Abundance* と  
 いふべきものを展開してゐる。加藤君によれば、この説とも専門科学者の検証を必要とするもので  
 是れ自身の引用する専門家の検証はその結果に於て寧ろ否定的であり、従つて之によつてマルサ  
 スを反駁し得るは社会改革に伴う増殖力の本質的変遷を論証することにはかゝらないといふ。  
 がそのような意見を述べたのは、我々は現在既に恒常的出生率減退傾向に當面するに  
 到つてゐる。この最近の人口現象に対する社会主義的諸家の見解は之を所謂物質的必然性のイテ  
 オロギ一的表現として説明するものが一般で、即ち資本主義繁栄期に於ける過剰人口と同じく、過  
 剰人口は未だゆくゆく資本主義の病態として共に現在の社会機構にその原因をもつてゐることになる。  
 人口論に於ける社会的要因の重要さを認める点については著者も勿論異論はなからぬ。その点に於いて  
 はマルサス説を補充すべき必要さへ説くのであるが、さりとて最近の出生率減退傾向は決して  
 マルサス説の根本前提を反駁するものではない。人馬約五割の努力は決して自然的な過大増殖  
 力の事實を否定するものではないと著者はいふ。いかにいへば、未だ社会主義的社會に於ては  
 或は寧ろかゝる社会に於てこそ、一切の社会機構から独立した人口制限の努力は一層必要となる  
 といふのが著者の言はんとする結論に外ならぬ。

四  
が、かかる政策的な人口制限、所謂産児制限の当否については、当然に社会主義の立場から異論があるわけで、その論旨の批評的根柢が後編第二章「干渉の理論」の題下に一括されてゐる部分であり、以下その大意を翻約紹介する次第である。本村子の「産児制限と社会主義」の意図する中心的部分も亦こゝにあるわけで、右表題を以つて本編の表題とする所以がある。本編紹介部分の因茲目次を承せば次の如くである。

目次

- 一 実践的マルサス主義の拒否
- 二 新マルサス主義の拒否
  - a 社会的な整頓としての出生制限
  - b 経済的及び政治的闘争手段としての出生拒否
- 三 社会ダービン主義的抗議及び修正主義と新マルサス主義の綜合

終 語

「産児制限と社会主義」

人口は過度に増殖する自然法則的な傾向をもちつてゐるという考えが少くも種々の実践的導引が導か

此が、その一つは、人の法則から生ずる苦悶と解放しようとするもので、且つその手段として、  
次の二つの場合がある。

1. 結婚生活そのものの制限（実際のマルサス主義）

2. 結婚生活に於ける出産の制限（新マルサス主義）

が又これとは反対に

3. かの苦悶と解放を拒否して無干渉な増殖を望ましいとするもの。無干渉な増殖こそ生命の  
の過剰生産と之に伴ふ自然淘汰による肉体的精神的存在、随つて又経済的文化的な一層の発  
展の爲に不可欠の前提をなすものと考へるものもある（徹底的社会ダーウィニズム）

これらの生命中心主義的な努力に対して社会主義が如何なる関係に立つものであるかの問題は今  
までのところ蓋も之を組織的に批判的に考察した者がない。さういふ事情もあり我々はこゝに  
我々の研究目的との関係に於て極めて簡單なる概観を試みねばなるまい。

生活空間に關する「通常の」社会主義的理論が旺盛なる人口増加を最も主要なる生産前段と考  
へる如く、生命の再生産に關する「通常の」社会主義的理論は子孫使命の過剰乃至は過小といふ  
ことを單に一層の物質的必然性のイデオロギイ的表現として扱へない。隨つて究極的には生命  
中心主義的な課題を提示して單に経済中心主義的をそれのみ認容することとなる。曰く、何れ  
りも先づ社会主義の意匠に於ける経済的要素を志向せよ、然らば一切の他のものも亦与へらる  
べしである」と。

これも拘らず、社会主義は人口の制限を望んでをり、性暴力制限の思想を宣伝するといふ主張は  
一切を自ら繰り返されてゐる。さすればその一例で疑はしい統計を基礎として一見若人、若女

ルサス主義的なる社会主義的人口綱領の効果を説明しようとする。之に伴奏してゐるものは  
ゴストで、新マルサス主義は社会民主主義の目的及び目標を近い将来に達成する爲めに決して懸  
念し難い一手段である」といつてゐるがケチユケは之と反対の意見を述べて、次の如くいふ。社  
会民主主義はこの場合に於ても亦より勇敢なる同盟者としての役目を果たさねばならぬ。社会民主  
主義は實際、生活と其の探求とを知つてをり、また人間の営生の全体は、それにより善く組織され  
るに非ざるほど、人間の数を一層加速度的に増加させるものがあることを知つてゐる。隨つてそ  
れはマルサス主義的乃至は新マルサス主義的方法を推薦することによつて労働者を救護しようとする  
ことを拒否するものである。そしてユリウシス、シオルフ自身でさへ、救護人口政策協会と  
対する、社会民主主義の事實的態度に教へられてその意見を緩歩し、次のよう自濟解をしてゐる。  
社会民主主義は多少優越的であるの最後の態度でその最後の態度を未決定にしてゐるとはいへ、新協会  
はその「最大の」敵手と社会民主主義の中核であるには及ぶまいと。  
このような意見の対立は如何に説明せらるべきであらうか。

実践的マルサス主義の拒否

道德的柳劑という迄マルサス主義的方法は、マルコを例外とすれば、凡そ社会主義者によつ  
て一律に拒否せられてゐる。この手段は疾病よりもまだ悪いと。この拒否の理由を最も善く説明  
してゐるのはカウチンギである。曰く、実践的マルサス主義は平均婚齡を命令を爲して晩婚を導く。  
之は何を意味するであらうか。それは子供たれどつては彼等が成年に達するまで両親を監視  
し教育を受けし機会を少なくし、早く孤児としてさうことを意味する。そして之を児童に對する



思慮皆の最大原因として、不興者及社会的異常者や犯罪者の増加することと意味するがマルサス  
 的方策の實行は猶ほ之とは別な他の仕方でもかゝるルンペンコロリアート層を増大させる。パイ  
 エルンの實例の示す如く、結婚率は私生児を増加させるのである。が私生児は周囲の如く犯  
 罪者及び準犯罪者の比率が高い。之が実驗的マルサス主義の子孫に対する影響である。

下併 成人層に對する種々の結果も考慮せねばならぬ。独身生活の生理的弊害は大きい。が、  
 之に及して子孫に對する教育の負担の軽いこと、職業競争の上で優り好都合であるという社会  
 的利處も亦大きい。そこでこの利弊の比重が同量となるが、カウンティは犯罪統計や精神病統計  
 や自殺及び一般死亡統計を基礎として結婚生活は独身生活より望ましく、隨つて結婚を易くす  
 ることは人間的幸福の増進を增大することであり、結婚を抑制することは之が減少することにな  
 るといふ結論を導いてゐる。

右の思慮は社会上義務天りの間、異議のないものであるばかりでなく、最近の諸研究によつて  
 も孤獨死と申すところのものがある。尤もこの種の調査に當つては独身者三種類に觀察すること  
 が必要である。といふのは青年男子の独身生活は概して老衰の生活よりも望ましいものと思はれて  
 きた。且つそれは主として一定の職業に基くものと考へられてゐるが、しかしこの職業という実  
 際は却つて男子に不利なやうな事實もある。それは例へば独身生活と犯罪との關係に現はれてく  
 る。男子の独身者は今年令の他の男子に較べて社会的低格者の要素をより多分に含んでゐるが、  
 独身女子は比較的により低い犯罪率を示してゐる。此の現象に對する満足を説明はまづなへられ  
 ない。女性に犯罪率の悉本的に低いことは恐らく女性が一般に生業の屬の即争から離れざる  
 るといふ事、感、といふ事、独身女子が比較的に一層過失が少いといふこと、之に上つては

説明せられたい。結婚してゐる女子は比較的により多く犯罪的素質をもつた又から悪影響を受けるといふこと。母父又この結婚によつてこそ女子に對しても小犯罪者となる層階面が確伏せられるのだといふことを入は一般に指摘する。乍解せられた研究の以て之を通じて多く見出されたる最も重要なる事實は女子の及社会性の根本形である。此種制度が徳養すべき統計的根拠を許さなばといふことである。加之は單にこゝに附記するに止める。

2. 新マルサス主義の拒否

右マルサス主義に伴う弊害は新マルサス主義的実行法を適用することによつて回避せられる。この任努力制限法は、人間に性愛の享樂を断念せしむることなしに、生産力の抑制を手段として、貧乏を免れんとする。かゝる努力に對する社会主義者の態度はその人口理論的立場から痛結する。及マルサス主義的を大多數の社会主義者は任努力制限政策を拒否するであらう。之を推薦するものは、ハ、少数のマルサス主義者のみであるといへよう。

かゝる窮乏の相異を、出産制限が社会主義にとつては社会的治療劑乃至は万應藥としていばなす資本と労働との間の現在の闘争に於ける武器として提供されることによつて相當重大なるものになつてくる。懸念的な論証は次の如くである。労働の価値はそれ自身が稀なる時々の或る其の「自然的価値」以上に評価される。生産者は窮乏に強固せられて其の生命を毎週又毎月切り売りせねばならぬ。彼の労働は労働力の實際の価値によつて計られず、資本家が彼の働き手を買出すその困難さから計られる。前場と労働を求めざる者の数がより多くなり、そしてお互に投げ売りすれば

するほど、彼等はいよいよ悲惨になる。水産産業は数十年にしてかゝる状況を根本的に排除することができる。労働階級の生産の減少によつて人間の供給は継続的のその需要よりも少くなるに相違ない。時に労働者によつて緩和されるが、古い世界の人間市場は生産拒否の圧力の下に労働者階級の密着なことを特徴とする。若い植民地の労働市場の如く外観に次第に接近するに相違ない。人間商品の過少供給は先づ以て失業を排除し、更に続いては労働を労働の完全価値にまで引き揚げ、且つ地代と資本利潤とを継続的に低下させる」と。

我々は、此政に過剰人口に対する永久的にして且つ根本的に必然的な豫防手段として、水産制限と労働階級の現在の地位を向上せしめ資本主義を楕体化乃至完全排除して社会主義を實現する場、綜合的及び政治的斗争手段としての水産拒否とを区別せねばならぬ。「人は、この人類再生の望みをみるにかゝる、然らずんば徒に現存秩序に対する憎悪の砲を燃やされるに過ぎない。」

2 社会的忌殺劑としての水産制限

妊孕力制限政策はあらゆる観点より、前修正主義的社會主義者の志願と以てべきである。此

社会的忌殺劑としての妊孕力制限を特に断乎として拒否してゐるのばラッサールである。

彼は「貨幣鉄則」の牢獄からの脱却として解散さ水易いから、提案について意見を述べることを常に回避したが、一度だけ彼は解散を互へねばならぬやうな破目に立到つた。その解散は極めて特色あるものなので、こゝに言葉通りに引用することとする。曰く、「我々は労働者に対して子供を生むことを疎止するといふ方へ行く如何なる契機に於ても賛成することができない。」

人、かゝる忠告は兎舐に類してゐる。もと／＼衰うべき何物をももつてゐない者に子を産むことを禁止することは不可能である。特にかゝる忠告の行はれ難い理由は、彼の隣人も亦全じこととするといふ何等の保障をも与へられぬといふ点にある。が隣人の子供はその産を供給することによつて労働を引き下げると一労働者と有り彼自身の子供と全じ履着を彼と与へることになるだらう。この理由こそ、しかく平等であるにも拘らず未だ嘗て注目せらるゝことのないものである。且つ我々にとつては悪象であるそのやうな忠告の及てを幻想化して了うところの當の理由である。

2. カルジヨウは、能爾面に見るやうに、好めて子供を二人に止めようとする。といふのはあまりに子供が多過ぎると彼の好適な生活關係が個人的に圧迫されることになるからである。

3. 兼併労働者——私は嚴密に労働者という言葉の中に第一項に述べた者だけを總括する——が子供に若癡するのは彼の個人的地位に於てははななく、寧ろ彼の階級的地位に於て、ある。そしてこれからは如何なる悪魔も解放してはくれない。

4. かゝる忠告は非道德的でもあり、非人間的でもあり、非自然的でもある。そればかりで人間の本质に及し、そして結局は完全なる動物的殺戮と帰着する。

5. 最後に此の忠告は完全に非経済的である。アダムスミス以来すべての經濟學者は人間の労働が凡ての富の源泉であるといふ命題を繰り返してゐる。人間が多ければ、富も亦多いためである。若しそれが今日に於ては事實でないとするならば、それこそ我々の全經濟的背反性の中にその理由をもつてゐるところの深刻な矛盾の外ならぬのである。それ故に此の背反性こそ変革さるべきものなりぬ。さうすれば人口の増加は富の増加の源泉となるだらう。生活資料（穀物と

の他では人間と同じ程度に知識を蓄積し得る。といふマルサスの議論は既に久しく論破されてゐる。若しさうでないとしても、それは我々の今日までを解して、将来の搾りかたに於て恐らく一千年もの後に初めて腹慮し得るであらう。程度のものである。

6. 経済的及政治的閉鎖手段としての生産拒否

ラッザールの跡をついで看は青年カシキリである。といふのは彼は彼日プロレタリア地位改善の爲の手段としての生産拒否を拒否することが同時に賃金鉄則を新しく基礎づける所以に外ならないと考へてゐるからである。彼はこの賃金理論を論争の余地なきものとよび、そして此の理論がら争か収る實際的考察は何等の初歩をも期待せしめない。ことを論証してゐる。曰く、その価格を引き上げざる爲めに労働の供給を減少させることが観察されるであらうが、併し供給の減少と商品の騰貴とは需給の均衡を結果する。このことは労働の場合に於ても亦考へられぬであらうが、資本の労働に対する需給はかような方を常に効果のないものにして、了らざる程弾力性で驚んたものでないであらうか、資本は自身に於て既に弾力性であつて、その総額と増大とは社会に需要の欲求と蓄積不能との脱力が優勢であるかに依存する。可変資本、兩方労働に支出されるところの資本部分は更に一層大きき自弾力性をもつてゐるのがその特徴である。剰余価値の如何なる割合と資本しずかさを決めるのが資本家であるように、不変資本と可変資本の關係を存続しようか乃至は変更するかの鍵も亦資本家の手中にある。資本主義的生産方法の自然的傾向は不変資本が増加し可変資本が減少するにある。生きた労働力を機械の力によつて置き換へようとする傾向は労働の増大と共に増大する。生産制限を現存秩序内に於ける閉鎖手段として採用することか如何なる結果を導くかといふことはこの点から明瞭である。労働者がマルサス主義者乃至は新マ

ルサス主義者となるならば——制限の方法如何はこゝでは向題ない——彼等ノ数は同一に止まる  
か乃至は減少する。労働は騰貴する。それは機械を、即ち従来はあまりに高価に見へたが今やそ  
の価格は之によつて置き換へらるる労働力の価格よりも安くなつたとこの此の手助を導き入ル  
るのが却つて利益となるという式まで騰貴する。労働者は解雇され、供給は増大し、労働は低下  
する。人の減少するところは労働者の地位の強化であるが、併し敵も亦その威嚇を之に依りて増大す  
る時に之らの強化は一体向も後にも立つたうと。

特に機械の導入は労働に対する需要を減少せしむる能動的に増加するといふ一類の論者ノ見解  
に於いてはカウツキーは之を誤解として拒けてゐる。曰く、長い眼で多ると確かに機械を導入し  
て産業に於ては労働者の数が増加してゐることを検証することかできる。加此の場合人は悉る一  
國の高度に発達し失産策が他國の選んだ之れを過減乃至は縮小させて、そこで労働者と過剩にし  
てゐるといふ事實を忘れる。そして之こそ競争者及び顧客である國々技術的機械的に強化さ  
れてゆくに従つて今日その巨大な労働人口によつて人目を惹いてゐるところの嚴初國をも結局  
は巻き込んで了ひ、そして可成資本の相対的低下と絶対的低下に及へて了ふであらうところの其  
の過程である。

生産制限を社会的明争手段として思案なものと考へる以上の論証によつてカウツキーは同時に  
賃金鉄則の新しい基礎附けをしてゐると考へてゐるが、我々の見るところではそれは新しい基礎  
附けというよりも寧ろ補充である。ラッサールによれば労働の供給を自分の利益とするように変  
化し得るのは支配者たる資本であつて、プロレタリアは盲目的にこの眼に見へる命令と誘  
ひに従つてゆくだけである。カウツキーは之に次のように附け加へる、子孫を供給するところ

労働者も少く、労働力に對しては、漸進的改善を期するに當り、労働力の供給を以て停止することゝ防止すると。

人間労働力の供給の減少は、政府は経済的及び政治的兩手段として推察し難い。

労働者は――海外に移動するかも知れぬ、結婚を遂げ、或は一人も子供を産まなくして行くかも知れぬ。が資本は常に労働の増産を防ぐ手段を発見するだらう。人はいくらでも採掘を發明するだらうし、又カーボンの半分を放棄場とし他の半分を野蠻の養殖区として了すこともできよう。そして、もしも農産物の増加が激早や不可能だといふやうな爲うでかゝる場合が生じたとしても、その場合でも、採掘を資本家は労働の増産を防ぐ方法を知つてゐよう。彼は支那や印度から少くも、その上に生産量を増やして行くかも知れぬ。そして、彼が何百年か之後に夫々サルサス主義者となつて、遠征に類するやうになつた時、即ち資本家が地球上の何處にも人間労働力を探し出すことが出来なくやつた時、その時は初めて、恐らく労働者は馬鹿にするだらう。かその頃までには、幾多の労働に使用するより好むことが成功しないであらうか。

従来が新らたに活流な輪轉の百象として再燃したのは一九一六年のベルリン大会で急速な側から出産能率の増進が政府せられた時であつた。この時も亦労働者は賃金基金と労働者救済とにして分母の人口が小さくなるほど、その額は増大するものだという計算例證が持ち出された。そして更に進んで、出産能率にまで尖鋭化された。労働者は、その生命を根絶して資本主義の土を根絶して了すまであらうとまで考へられた。が急進派の指導者たる自身はかゝる考へに反對であつた。

その意見の二三を大会報告から拾つてみると以下の如くである。アララソムトギンは言へ、人

は手の供給を減少せよと欲する。加その時は資本主義は機械の完全化によつてその需要を制限するであらう。人は肉類を最早供給しまいと欲するが之と共に我々は革命的闘士の数をも亦機械的に減少させて了うことになる。山師医師的治療によつて社会問題を解決することとはできな  
いのだと。——ルイゼツィーはいう。それは党の関心事でもなれれば、前々闘争の手段でもない  
と。——アドルフ・ホフマンは労働者の生活に光と空気を要請してゐるが、毎し出生制限は之を杜  
絶してゐる。——コーザルクセンブルグはいう。プロレタリアートの爲の闘争手段として子供制限  
は決定的に拒絶せられねばならぬと。——貧民は單に若干の慈善を乞ふが、それをも多子家  
族の窮乏への顧慮が彼等とさういふ意見に駆り立てたに過ぎない。

修正主義者たちも亦「出生産業の経済学」を拒否してゐる。

クエツセルはいふ、この社会経済学的理論には實際「悲劇的の帰結」が隠されてゐる。それは  
子供がもう生まれないとするプロレタリアの生命は根絶されて資本主義の世界は解消してし  
うといふことである。我々はこゝでマルクスが語つてゐる一英國工場主ピールの物語りと思ひ出  
す。ピールは新ホランドで一ツの工場を建設する馬に其處へ資本と労働者をもつて行つた。が労働  
者たちがすぐに見付いたことはこの人跡稀なる土地にあつては彼等は賃労働者となる必要はな  
いといふことで、そして彼等は百姓や職人や商人のような自由な独立生産者になつて了つたのだ  
ある。とはいへ上の提案は拒否されねばならぬ。一般的な全歐洲の出生産業の如きは一個の空想  
に過ぎない。が之を一々國に制限するならば、出生拒否は國民的危険ともなり又労働者階級に付  
する危険ともなる。國民は滅亡に類することになるが、併し労働者の利害も亦着しく侵害せられ  
ることになるだらう。自國の労働者階級が國民經濟の必要とする人間数に相対して増加しない時



には、経済的文化的に遅れた諸外國の労働者がこの同様に、露れ込んで来て、労働水準を、第一にはその供給の増加によって、更には彼等の低い生活水準によつて押し下げるか、乃至は少くともその上昇を妨げることになる。たが、少くも特にプロレタリア立場からいつても出産政策という「物産救済」は経済的にも社会的にも何らの利得のないものであると、又バルンシュタインはいう。経済的即事平穩としての出産拒否の最後の障り處である賃金基金説は既に破れてゐる。

人口の増進を止めようとする如何なる試みをも非道徳的とする聖書の信仰は動搖して居り、ヨーロッパの文明諸國の出産率は後退して、ある。「それ故に出生の制限は以前に比して労働階級の社会経済的関心を惹くこと少ない。」それは個々の家庭にとつては、子供の多いことが一つの経済的負担である限り、或る程度の意味をもつてはゐる。が「それが断じて社会問題の社会主義的解決ではなく、寧ろ反対に経済的進歩を侵害する傾向がある」ということについては論議の余地がない」と。蓋しスプリングルのいう如く、「経済的労働は國民共同体に於ては人間を節約するどころか寧ろより多くの人間を要求するものであるから」。

大戦後に於ける社会主義の人口政策的目標が、一方には競争による人口増産の印象下に、他方には破局と調和條約と競争の直接的諸結果とに伴う経済的地位に衛生的諸關係下に、如何に災患したか、を個々について探察することとは異なることである。

以前と全く面及び對照解を例示する以下の如くである。「独逸民族は生長せねばならぬ。独逸民族の中に潛んでゐる力の必然的成長を信じて疑はぬ所の我々凡てはそのことを維持せねばならぬ。」(Rudolf, Die Welt Krieg a. des "Gibst" suppositionen, 1915)。「独逸の未來は人口の増数が再び上昇せざるか如何にかゝつてゐる。」(Klaus Bennis, Wie tritt das Popi-

George D. Glucke (1951) "人口の増殖的傾向が表はれる時世界経済的民衆としての我々の地位はカルタの家が如くに衰滅して了うであらう。その時に我々の文化的將來は全くあやしいものとなる。その故に、この急速民衆の全運命は、はる問題があるといつても誤して言ひ過ぎではない。" (Ideas in Land Days, Vol. 19, II, 1917) — 他方、於ては次のよう有意見を見られる。「我々の政治的、経済的、民族衛生的に住宅問題の現状に於ては、今後に於て生産を抑制することになるやうに一切を計画化せねばならぬ。生産促進そのことは確かに極めて悲しむべきことではあるが、しかも今日に於いては一ケの生産への福い存のである。」 (Egging, 1951)

Global Menegality, D. Glucke, 1919) 又之、生産制限を社会主義の實現の第一手段として新しく基礎づけようとする新しい独断的武断については、この考慮する価値がある。 — 及世界経済的論争に於ては人口悲観論者の立場が — アドルフ・ワグナーの場合に似て — 及世界経済的論争によつて武装されてゐるからである。すなはち小論文に於てフエツセルは社会主義的生産方法の限界を指摘してゐる。

彼は、ドイツの先天的労働に基礎して、その家後的労働機械と結びついた農地、大企業と同等の価値があるばかりでなく寧ろそれよりも優れてゐる。従つて此に於ては社会化は生産量とできるだけ大きくしようとする努力に相応するよりも寧ろ矛盾するという考へを承認してゐる。

が彼によると社会主義的生産方法に違し難い大きな第二の私経済的孤島をなすものは輸出工業である、曰く、それはその本性上社会化し難い、 — というのは社会主義的生産とは共有の労働手段による自己充足的生産を意味するが故に、社会主義的生産方法の限界は外國の必要の爲め、 — 而して世界市場の爲めにする世界競争場裡に於ける生産の初まるるところに横はるからである。 — 世界市場の

爲め生産の初まるところで、社会主義的經濟行爲の可能性は消失する。輸出工業は是れ故に社会主義がその勝利の行進途上に於いて見出すところの根本的障害を形成する。秋運に於ては工業製品の輸入は食糧輸入の支拂の爲に避くべからざる必要をもつてゐる。プロレタリアートの秋收もこの支拂については何等をも変化することゝかたがぬ。乍併、輸出工業を縮小するに効果のある一手段がある。即ち生産の減少である。輸出工業の人はさば一國民が之を阻害を實行したるその瞬間からその國民にとつてその強迫的な必然性を喪う。生産減少の志願として総人口が減少するならば、輸出工業は亦市場を縮小することが可能となる。といふのは外國の食糧と原料とに對する需要は國民人口の減少と共に自ら減少することとなるからである。意識的なる生産統制によつて、凡そその國民はその輸出工業を本質的に縮小し、かくして社会主義的生産方法に近づき難い國民經濟部門をいよゝゝ縮小することが可能である。とは、制限とはエルフルト綱領日式化する格條方式を切迫せる修正の必要から防護する爲の方策と考へらるることとなるのであるらうか？

さう考へては有名なる修正主義者たちは大まき手段をしたことにならう。彼はいふ、さうでは無い、輸出工業は生産減少によつて縮小しようとするのは党の教義の爲めではなく、寧ろ輸出工業が商業的敵對關係を招き、破滅的の圧力をもつて、人類を悲劇へと導かざるを得ないからである。輸出工業が世界經濟的基礎に於ける社会主義的財貨交易によつて置き換へられまい限り避け難いものであることには、その同じ宿命が諸國民間の血をまぐさい葛藤を招かざるを得ないのと一般である。尤も社会主義的に統制された財貨交易は大陸ヨーロッパ的思想、即ちヨーロッパの歴史面裡に於けるスラムの殖民地や地中海の周辺諸國と併せて高度の自念性をも

つた一々の完結的經濟領域としようとする思想の實現によつて達成されるかも知れない。もしも個々の國民經濟に於ける商品輸出は、この經濟的の一體化された大陸ヨーロッパが少量では最早外國の需要ではなくして自分自身の需要となるが故に、その非社會化的性質を喪ふことができなかも知れない。とはいへ、輸出工業とその危險にこのようになつて打ち勝たうとするには、最も基本的な前提が欠けてゐると、以上より如き理由によつてケッセルは、平和の及ぶ社會主義者として、妊孕力の制限を推奨する力である。がこの提案は以上の如き關係に於ては一種の諦観的感情をケーンズが言葉を借りていふには世界聯合の感情が今日の我々の魂の中でそれほど夥かきといふ漸々の感情から生れたところのものに外ならぬ。

### 3. 社会ガルスイン主義的抗議及修正主義と新マルクス主義の融合

水産肥の政策を労働者の地位向上資本主義の根絶、社會主義實現の爲の斗争手段として勧奨すること、性生活の知性化と「過剰人口」の苦惱に對する必然的豫防手段として、即ち生全再生産の非經濟的消費の形式からより一層合理的節約的として經濟的原理に相應せる増殖形式への望みしき移行として把握すること、は全く別の事柄である。マルクス理論の社會主義的賛同者は既に於て新マルクス主義と稱する社會ガルスイン主義の就水をとるべきかといふ選擇に直面する。兩傾向とも人口過剰の自然増殖傾向を拒否し難い生物學的法則と考へる立場から出發してゐる。が其處から生全再生産の爲め、結核を引き出す段になると兩傾向は分岐する。新マルクス主義は苦惱を予防する爲めに妊孕力の抑制を望むに對し、徹底的なる社會ガルスイン主義は人類を不斷にこの苦惱の影響下に置く爲めに妊孕力の障害なき展開を要求する。といふのは社

金一カイシ主義は、この階級の中は、貧乏人類の有務的物も貧乏の者も少く思ひて、進歩一般の爲の  
最も強力なる機軸を認めるからである。

この少くマンチエスター自由主義の最後の方版であるこの階級なる社会が、カイシ主義が、  
カイシを史徳とすることが出来るか如何かといふことは、カイシ主義の異理凶悪の問題と共  
に、討論すべき問題ではない。然るその特色ある議論は、次の如くである。出産超過が多け  
れば多いほど、そして人間の過剰が甚しければ甚しいほど、それだけ生存競争はより深刻となり、  
劣等者の排除はより過酷となり、有能者の淘汰はより確実となり、そして人間の向上発展は行す  
る所も一層確実となる。又、出産制限は人種の劣悪化、種の退化と激甚と、罪くかそれには、単に  
出産制限だけの問題ではない。除根の進行を妨げると、この一切の方策も亦同じいと、社会改  
良と徹底的なる社会が、カイシ主義とは、此れは徹底的に難き対立物である。その種々な容を  
つた社会が、カイシ主義は、一頁を占めず、凡そその民主主義的、社会政策的、社会主義的及びキリスト  
教的人道主義的の諸機軸に對して、それらが自然淘汰の野蠻性を緩和せんとする限り、競争及び  
挑戦状を突きつけてある。種々徹底的にもこのやうな立場から競争と競争の生んだ甚い独逸民主  
義とその諸政策、制度を、明瞭の運命共同体にまで形成し、恐るべき圧迫を分配し緩和し、驚くべ  
き児童の窮乏と闘ひ、そして産業機械とその故意ある殺人の妨害によつて生み出されたる失業者の  
窮乏を緩和しようとする諸政策に對して、單に外觀的ののみ自然科学を論據としてゐるに過ぎない  
ところの攻撃が行はれた。普通選挙法が間違ひであるばかりではない、幼児の死亡率や、伝染病  
や、彼馬鹿に對する刑罰も間違ひである。或は失業者救済も社会保険も、一言にしていへば生命  
の保存と保護に關する我々の全政策は、それが除根の進行を妨げるが故に、間違つてゐると主

殺されるのを聞くと、我々はかの有名な東ロンドンを「英吉利の國民政務病院」と呼んだ。テイル  
シのことと思ひ起さずにはゐられぬ。

曰く、自然は夫々種の進化と致すの刑罰によつてのみ自らを運行させる。人間の愚利、食糧の過  
少は自然の放すところ、且つ進歩の爲に最も効果ある唯一の標杆である。其此政にこそ生命  
の源泉に對する豫防的障害は極端に少く、不眠の人間過剰生産こそ望ましい、除車檢、い  
ひかへれば均霑再現という抑圧手段を思ふ存分に働かせるべきと。

社会主義がグーティン主義一版に對する關係については、ルドン、シオルトマンによつて  
導入された社会主義的グーティン主義という特殊型と同様、これは問題とするに及ぶまい。この  
特殊型は若干のグーティン主義の原則を自然科学から社会生活の中へ持ち込むもので、社会は必  
然的な発展の結果次第に社会主義のより善い形式へ移行してゆかぬばならぬと考へるものである。

社会のグーティン主義はそこまでは行かないが、併し社会のグーティン主義は社会主義の立場から  
共同線を張つてよいと思はしめるべきな若干の要求を掲げてゐる。例へば——今日の階級分化  
も亦不断の淘汰の結果であるといふへさう考へる外にその成立を説く仕方はあるまい。這例の淘  
汰主義的見解には奇妙にも矛盾する處へであるが、——社会的窮乏は直接には自由競争に帰着せし  
め難いけれども併しやはり「富むる西郷」ともつ子供は有能な貧乏人よりも千倍も目標に接近して

ゐるといふよりな馬鹿馬鹿しい状態」の下の自由競争の結果であると言張される如き場合がそ  
うである。そこが漸次に不適当な文明社会に於ける諸條件を淘汰し都合のよい自然状態に於ける  
生存競争の諸條件に再び等しくする爲に相競法を廃止し私有財産とその獲得者一代に制限すると

いつたやうな根本的変革を求むる諸見解が、くるわけであるが、極端なる社会のグーティン主義

のか、る反資本主義的傾向こそ社会ダーウィニズム主義は社会主義に對して極めて同情的なりしむる所以の理由である。尤も兩者の世界観は全く相違した二つのものである。即ち一方は自然科学的に裝飾されたる社会マンチエスタト学校の冷酷で、自然淘汰の全能を信心、そして幸福の導入も正義も倫理も顧みるところのない世界観であり、他方は救世観に宣つて準備せられ、人間の運命の改善、進化過程に於ける外的誘導因の支配、社会機構の人間の本能に對する教育的組織的なる干渉を、即ち凡ての生けるものに對する防護と救済を求めるところのキリスト教的人類主義的なる或は民主主義的且つ社会主義的なる近代文化の世界観なのである。カエフエルのハフタエウク「こゝにも亦所謂傾向的理論にとつての悲しむべき事例がある。社会主義者は敢へて社会ダーウィニズムの真偽如何を問ふことなく、夫がそれ自身が自分らにも有用であるか如何かを、即ち其間の敵と闘ふ為めに有用であるか如何かとの只問題としてゐる。その場限りの台盟を結ぶのは實際政治家の去に許さぬことである。理論家たるものはもつと勇氣をもち、そして自分と護る為めに敵の助けを請ひるよりも寧ろ進んで戦死する覚悟がなければならぬ。

乍併、その「革命的」経済的なる個々の要請に於ける一時的の一致にも拘らず、社会主義と社会ダーウィニズム主義とは敵対的關係にある。極端なる社会ダーウィニズム主義の生命中心の在諸説も、社会主義として自己自身に忠実である限り、決して社会主義者のもれと同一では無い。人口は自然的な過度増殖傾向をもつという生物学的根本原則の正統派社会主義による拒否、即ちマルサス主義も新マルサス主義も社会ダーウィニズム主義もが一様くその據り処としてゐる所の理論の拒否は皆然に性学を制限の拒絶を導かれる如く、又その技能或は適応力の悪悪によって同一種の仲間を淘汰が行はれるという意味での自然淘汰過程の实效性の拒絶にも導かれる。支持し難いといは、併





新マルサス主義なるものに對して感ずる道徳的懺悔が、はる限りに於ての如き理由はあらう。確かに新マルサス主義は唯だ一鬼乃至二鬼しか奉げない結婚生活の中で実行されるばかりでなく、また四人、五人、六人もの子供をもつ長結婚生活も新マルサス主義的に制限し、此長結婚であり得る。が我々は十二人乃至十八人もの子供をもつた「制限されない」結婚生活を果して眞面目に欲するであらうか。人間力と人間生命のこのように無意味な狂乱を果して眞面目に欲するであらうか。我々は何百万の生余が一瞬燃え立つた後ですぐ又消えて了び、何十億という國民財產が子供の宿備代として消費されるようなことを欲するであらうか。妊孕力の制限に對して敵對的立場をとることは國民經濟的にも文化政策的にも維持し難いものである。

下併、石の秘産は方等者歐除遺産を稀化するといふ「民族衛生學的」考慮によつて正当化せられることがないであらうか。之に對する新マルサス主義的社會主義者の答は「自然的淘汰と社會的淘汰の根本的相違の指摘にある。

平等の平等條件の創造せられる時にこそ初めて淘汰説的見地よりしても恐らく利益を淘汰が行はれることとなるであらうか。併しその場合でも身ほ之を否認せねばならぬ理由は文化人の優生學的理想は自然人のそれとは別のものであるといふところにある。最も価値の多い遺傳財は頭腦的素質であるが、能才や天才は屢々、盛衰を肉體の中心に著つてゐる。嚴密な生命淘汰は恐らくカントやバイロンやメルレルやバスタード・ジエンスの筋肉の強い平均人の利益の爲めに織除しこつたことであらう。妊孕力の制限による生命淘汰の排除はそれ故に正当であり、社會主義は生命を器たる者の凡てをその保護下に置かねばならぬ。之に對し次のよう反對がある。社會生物學的に同意した概習的淘汰の爲めに人間の再生産過程に於ては方等者が平均以上に留置し優劣者が平

均以下の役割が、しなやかになり、その種の退化の危険がある。軍併、之らより及海峽  
的、諸要素は、社会主義的見地から之を見れば、すべて今日の社会と不可分な生計及分配上の  
欠陥に帰属せしめることが出来る。まさに此の欠に於てこそ責任感を伴へる世子の制限が社会生  
物学的に有効に作用することが出来るのである。というのば之によつてのみ価値の低い感分こそ  
の狂愛の集しみからは除外することなしにその増殖から排除し、更に加へては因体的精神の狂  
條件特に生じ勝ち不貞者も避避することも可能となるからである。弱体化されたる生命前兆を  
自由意志に基く増殖淘汰によつて覆へる。それが其の一面。が他面に於ては社会主義の意識に  
於ける経済的諸方策が控へてゐる。それは種々の改善の理想には悉んど一致し、難い因果的結合を  
なくし、子孫の増殖と財産の相続権への関心から自由にして一切の考慮や努力が貨幣が所有と相  
歳とにはなく、高層の性格、有能な頭腦、美しく且つ強壯な因体（カルトーン）のより一層の所  
有と相続に向けられるようになる社会的機会均等の世界を実現し、そこで新しい愛生学的理想、  
種々の倫理学の大補を行ち立たんが爲めの諸方策に外ならぬ。かくて社会主義的新マルクス主義者  
はより高層の道徳性の法更に立つて、性学制限政策が「有意的に結果を伴はしめ、性交を有意的  
に豊穠するその水から完全に分離し、さうすることによつて子孫の数と質とに對し、責任をとると  
いふ意味で「人殺の絶滅」はなきて其の崇高化の爲の手段」に外ならぬことを主張しようとする。  
そして之によつて「経済中心主義」と「生命中心主義」とを自然と社会とに對して愈々増大しゆ  
く支配権獲得の爲の一個の全面的なる努力にまで結合するのである。

生命の再生産に關する理論に於て、また生命に對する態度に對する態度に於ても、生活空間に關する理論に於て獲得し基礎づけられた人口政策的肯定の立場は再び理論化してゐる。「地上には凡ての人間の子らの為め、充分のパンが増加する」というのが社会主義資本主義の人口学的信條である。生産ストライキの強行とさう藤岡氏劇は社会主義者も根本的に人口経済に對しては意味のないものである。反對党の闘争手段として予算を拒否し、良からいつて社会主義的な財政政策や國家論を、例へば社会主義は公共的の事業と支出との出来るだけ根源的な制限を望んでゐるなど、いふ風に結論することか許さぬといふと同様に、資本主義に對する闘争手段として三の、人々によつて繰り上げられ、生産拒否の推薦から社会主義は原則的に國民人口の保護なるべきを望んでゐると結論すること許さぬといふ。

社会主義陣營に於ける若干の新マルサス主義的代表者について、も亦同じことかいはる。彼等は人口任業者でもないが併し又狂愚的な小教論者でもない、優生学的色彩の強い新マルサス主義を生命の自覺的自足形成過程の一部として社会主義の總體的体系の一部としようとする者なのである。即ち彼等の強辯するところは次の如きである。社会主義は物質生産の分配の、また生産上その合理化を求むる、新マルサス主義と優生學とは人間生産と一方に於ては、その需要に、他者に於ては生産者の遺傳素質に適應させるといふ意味での其の合理化を求むる。そして、以上二種の綜合の故か、是しこのやうな目標、到達する途が可能であるとすれば、一つの新しい科學と一個の新しい人類とへ導くであらうと。

經濟、人口及び社会に關する探究はブルジョワ的及びプロレタリア的の両方向に分裂し、そ

して辱、階級的利害關係と説くこまかい議論で争つてゐる。が若し一方が單なる提議者でもなく、他方も單なる受益者でもない場合があるとするれば、それだけ総り多き和解は可能とならう。この二とが人口問題に於て妥当する。

人口問題は社会主義的理論の傷口であるが、ブルジョワ的社会経済学も亦、進歩を停止しざるは促進する人口増殖の両面的作用が相互に調整されるその一員を限定しよとする取纏に当面するや否や、やはり区分か全方に響かざるを得ない。一種の分業がこゝに出現の機を待たわけて、社会主義者は先づ経済及び社会秩序が人口扶養力や人口増加や個人の地位に及ぼす影響を觀察した。又、ブルジョワ的社会経済学はより多く之と反対の關係を、いひ彼へ此は人口の増加が経済と個人の存人間の運命に及ぼす影響を探沈した。その際諸説的に進歩抑制的な傾向を強く前面に押し出して、その反対傾向は之を社会主義者の手によかせし。社会主義者はそこでこの反対傾向の中に彼等の主題を見出たのである。彼等の使命を借りて表現すると、この両種の観測位置からの觀察結果の綜合こそ初めてその優勢位置の堅固な問題への統一的、科学的にして、且つ時々然じて実践的な攻撃を有効に開始し得る所以の多少とも確固たる一切断圖を得ることかである。

(本 多 枝 官)